

# 回想——私の英米詩研究

徳 永 暢 三

## 1

敗戦を迎えたのは昭和20年8月、旧制度の中学3年生のときである。中学5年（最終学年）のとき、旧制度の新潟高校を受験したが不合格であった。受験に出向いた新潟市の、海に向かって続く松林の間に公立図書館があり、私は中に入って E. A. Poe の詩集を棚から取って甘美な詩行を読んだことを憶えている。（受験では、英語の問題文中に“in the open air”という句があり、どういう訳かそれが理解できなかったことを、半世紀以上経った今も忘れていない。）ともかく、英語の詩のロマンティックな美しさを感じ入ったのは、ほぼその頃である。

英詩に接したもう一つの際立った記憶は、ほぼ同じ時期に Alfred Tennyson の *In Memoriam* という長詩を大学ノート2冊に写し取ったことである。（余程暇を持って余してのことか？）比較的最近読んだ山本夏彦「完本 文語文」で「十読は一写にしかず」という言葉を初めて見て、Tennyson 筆写を再度思い出したのだが、英詩を書きたいなどという大それた考えはなかつただろう私にとって、Tennyson 一写はアイロニー以上にナンセンスであるが、しかし注釈を頼りにこの詩をある程度理解できた、と思ったのは、少年にしては殊勝とすべきか。それにしても今すぐ思い出せるのは、“Ring out the old, ring in the new” といった行に留まっていた情ない。

更にごく最近、昭和23年の母校の校友会発行の文芸誌に、高校3年の私がジョン・メイスフィールドのある詩の訳を載せているのを見せて貰う機会があつて驚いた。そんな翻訳などした憶えは全くなかつたからである。記憶は私の場合、事程左様に頼りないが、しかし彼のダンテも「天国篇」(第33歌)で、記憶というより夢が悉く消え失せて、その情熱のみ僅かに残ることを歌っているのを知れば、慰められるというものであろうか。

中学5年か高校3年のとき、Edmund Blunden という詩人が戦禍のまだ残る日本に文化使節として来ていることを知り、彼が住んでいる英国大使館宛に手紙を書いた。予期せぬことに返事があり、氏の示唆に従って、オックスフォードの Balliol コレッジであったか手紙を送ったところ、Carmen Blacker という日本文化研究者から通信があった。高校を卒業した年の7月であると思うが旧制の東京高等師範学校に2年生として編入学できた私は、上京してから、慶応に福沢諭吉研究のため来日した Blacker さんと会い、そのときイギリス・ロマン派の2冊の詩集をお土産に頂戴したことを思い出す（彼女については、偶々手にした平成12年の朝日の夕刊（6.19）に、南方熊楠賞の受賞者としての'97年撮影の写真が載っているのを見て驚いた。彼女の姿を見たのは、学生時代以来これが初めてであった）。

さて、Blunden 氏宛のある手紙に、私は雨を題材にして書いた英文——半ばは詩の積りの、退屈凌ぎ——の断片を含ませたところ、氏は返信の中で、きみのものは詩ではありません。詩は最低こうでなければ、というコメントを添えて John Clare の2行を引用していた——“Enjoying sunshine, winds and showers / Silent is the life of flowers.” この2行は今日まで、ゆくりなく何度も記憶の底から浮かび上がってきたことを思い出す。

上京して間もなく、英国大使館に氏を訪ねた折、美味しいペイストリとコーヒーをご馳走になり、温和な感じの英国紳士の風貌に初めて接したが、そのときの会話で、Shakespeare は富士山のようなものです、と言われたことだけは今も記憶に新しい。それより後になってからであろうが、夜の凍った池でスケート遊びをする人を描いた作品とか、東京の復興を預言する格調高い作品（いずれも氏のもの）などを思い出すが、東京復興に関する詩の中の“numberless voices need must rise” という句がふと記憶の黄昏を突いて浮上する。（Clare を世に出すのに大きな貢献をした氏については私が云々するまでもない。）ともかく、多忙を極めていたであろう Blunden 氏が私ごとき者に示されたご好意を想うと頭が下がる。

ご好意のもう一つは、Oxford の袖珍版 World Classics の一冊、Shelley 詩集を下さったことである。氏が所有していたこの本には、ご自身のペン字のあの独特な筆蹟で短いコメントや疑問符が書き込まれているだけでなく、余白にごく単純な絵も描き添えられていた。Shelley と言えば、大塚の学校を卒業する前に、その教官室に入れて頂き、ガラス扉の奥から Buxton Forman 編の Shelley 全集の1、2冊を借り出して、初期の作品“Alastor”について意味朦

麗な英文で卒論を書いたが、そのときもその後暫くの間も、この World Classics 版を読んでいた。私自身のペン字の書き込みで汚してしまったこの小詩集ではあるが、ずっと後に、縁あって或る若い Shelley 研究者に進呈することになった。

Blunden 氏が帰国され、後任として G. S. Fraser という詩人・批評家が来日したが、私は Carmen Blacker さんの手引きであったと思う、氏の住んでいた成城学園のお宅を訪ねる機会に恵まれたことがある。昭和26年秋であったろう。Fraser 邸の玄関のベルを押し、夫人がドアを開けるや否や、私は Keats の “Season of mists and mellow fruitfulness” という句を声高に朗唱して夫人を驚愕させたことを憶えている。田舎出で礼儀を軽視していたこの学生は、いたく感銘していた英詩の中からこの句を選んで、いい気な劇的ジェスチャーを揮ったのである。

## 2

昭和27年春に小樽市の高校教師となり、3年余を過ごしたが、この港町は不真面目な英語教師にとってしかし、永い間第2の故郷のようなものとなった。また、在樽中に初めて、Stephen Spender, C. Day Lewis など所謂「30年代詩人」を、確か薄緑色の表紙のペンギン・ボックスの選詩集で知った。(その頃 Auden を読んだ記憶はない。) Eliot については、学生の頃に *Murder in the Cathedral* を読んだが面白味は判らなかつた。(この詩劇については後年、1960年にサン・フランシスコの小さな劇場で上演されたのを聴いたが、残念ながらコーラスの部分が少し印象に残っているだけである。)そして、Spender の「ベートーヴェンのデスマスク」などを小樽市のある同人誌に訳したことがある。

また、勤務していた学校の新聞に、確か e. e. cummings のある詩を訳したことがあるが、詞華集から拾い読みした現代アメリカ詩の、これは最初の詩だったのだろうか。Emily Dickinson の詩は、ずっと後になって読んだと思うが、その中で今も思い出す “There’s a certain Slant of light/... That oppresses...” という作品は、彼女の詩の中でも偉大なものに数えられると思う。

いきなり話をごく最近にまで手繰り寄せると、平成12年6月に、日本エミリー・ディキンソン学会で特別講演をしたとき、私はニュー・イングランドの冬の陽差しと、それに係わりがあるだろうピューリタンの翳りを漠然となが

ら想って、“a certain Slant of light” という句に触れた。ついでに、“slant” は E.D. 詩の行末押韻 (slant rhyme) を思い出させるものであり、また、——軽率な発言であったろうが——彼女の目が“slant”である、などと口走った。彼女の写真に映っている肉眼はともかく、内なる目、私つまり想像力は、当時としては著しく slanting な、非伝統的な傾斜を示していたのである。

驟って、私の英米詩「研究」は系統的ではなく不完全 (slanting) であったことを自覚するのだが、ともかくも、これまで途切れ途切れに辿ってきたわが道について、もう暫く回想を続けてみたい。

### 3

1957 (昭和32) 年は、人生の一つの転機であったと知る。私の研究歴では昭和という元号で呼ぶよりも西暦で呼ぶ方が身近になり始めたこの年は、小樽市から東京に移り住んだ2年後であるが、国際ペン大会が東京で開催された。私は亡き西崎一郎氏 (お茶の水女子大) に案内されて、会員ではないのにこの大会の会場に入れて頂いた。(西崎氏とは Blunden の縁で知遇を得ており、Mark Twain や Truman Capote の翻訳を手伝わせて頂いたこともある。) さて、ペン大会の会場で、私は長身で際立った風貌の Spender を一目で氏と識り、厚かましくも近寄って自己紹介したのである。これが大きな機縁となり、翌日かその翌日に氏の宿泊している帝国ホテルの部屋へテープ・レコーダーを持って訪ね、話を伺うことになった。今にして思えば、あまり面白い話を引き出せなかったが、そのとき録音したお言葉がやがてある雑誌に発表されたことの他に、はっきり記憶しているのは、自作ではなく白居易 (Po Chu-i) の友人 Yuan Chén のある詩の Arthur Waley 訳を著しく鮮明なアーティキュレーションと澄んだ声で朗読してくれたことである。この詩は私が持参した氏の名著 *World within World* という自伝に含まれている。

Spender 氏は帰国してから、自身が文学面の編集者である *Encounter* 誌に寄稿を求めてきた。それは、英語を勉強している私が日本文化との関係でどう考えるかといった主題について書いて欲しいということである。私は、英語を利用して何か仕事をしたい、また、いずれは日本文化に回帰することになるうなどと能転気な内容の記事を書き送った。私のこの短いエッセイは、編集者への二、三の反応または反響と共に発表されたが、これらの意見は私の趣旨が日本人のかなり平均的なものであるとする内容であったと記憶する。

氏はペン大会の翌年に再度訪日し、全国の幾つかの主要大学で講演や詩朗読を行ったが、そのとき、東京外語大、東北大、北海道大へは通訳として同行する機会に恵まれた。(1985年出版の *Journals 1939-1983* にはペン大会の他にこの時のことが観察対象になっている。日本でのことは余り多く描かれている訳ではないが、氏の勤勉と多忙に関わってこの「日記」には一切触れられていないことを一つだけ紹介すれば、仙台の宿に入った殆ど直後に、翌日の講演の原稿を書き始めたのを私は目撃した。) 日本で行われたこれらの講演を、私は是非とも出版したいと申し出て、氏は私の力量を危ぶむ気持ちがあったようだが、結局は念願は叶えられた。私は以前から知遇を得ていた福田陸太郎氏と一緒に、この講演集のテキスト版を金星堂から上梓できた。(福田氏には、そもそも友人の森山泰夫氏を介して紹介して頂いたのであった。) この本はかなりの反響があった。また、これと前後する時期に私は氏の *Collected Poems* をかなりの速さで翻訳し、思潮社から出させて頂いたことも忘れられない。

Spender 氏は恩人の一人で、私が British Council の留学生試験に失敗し(面接のとき、ある質問に充分応じられなかったのだ)、Fulbright 大学院留学にも失敗し、漸く1959年、同教員交換プログラムの試験に臨んだとき、推薦状を Fulbright 委員会に送ってくれた。他の人たちからも種々お蔭を蒙って、翌'60年、29歳のとき初めて外国へ行くことが叶ったのである。「60年安保」のこの年、豪華船 President Wilson 号でサン・フランシスコまで航海したのは、失敗続きの人生における思い設けぬ事件と言ってさえよいだろう。

時間は少し遡るが、直接知り合ったイギリスの詩人に James Kirkup と Harry Guest の両氏がある。J. K. 氏は1959年初頭に東北大学教授として来日するとき、Spender 氏からの紹介状を持参した。私はさっそく、氏の宿泊先へ赴いたが、そのとき初めて見る白皙瘦身のこの詩人が床をまるで滑走するようにして近づいてきたときのイメージは今も脳裡にある。私は偶々持っていた袖珍本 World Classics の現代詩アンソロジーの巻末に載っていた “The Submerged Village” という、氏の詩風的一面を代表する作品を褒めると、氏は即座に赤いペン字でこの詩の創作の背景を余白に記してくれた。(ついでに、氏は赤ペンを手紙に、それも封筒にまで使うことが少なくなかった。) 当時 K 氏は日本では殆ど無名の詩人であったが、詩人の松田幸雄氏が既に氏の作品を訳したことがあったのは、かなり後になって知った。

Kirkup 氏はその後日本でも非常に有名になり、新聞や雑誌の寄稿者、ラジオの出演者、ドラマの脚本家その他として活躍した。日本に題材を採った NHK

のあるラジオ・ドラマでは、私は乞われるままチヨイ役で出演し、3秒間英語で台詞を喋ったことも懐かしい思い出の一つである。

K氏との関わりについては他にさまざまな個人的記憶があるが、本題に戻ろう。「詩人の声——現代英詩の鑑賞的分析」(研究社)という共著を出すことが叶ったのは、私にとって大きな喜びであった。この本の成立については「はしがき」に書いたので省略するが、対談録音テープの声をタイプライターで転写した当時のエネルギーは、今の私にはもうあるまい。また、本書をつくる過程で、英詩を読む上での自信が僅かながらも出来たと感じたのも嬉しいことの一つであった。日本では当時「ニュー・クリティシズム」が盛んだったと思うが、亡き川崎寿彦氏は、本書が「分析批評」を批判しているけれども、これも一種の分析批評ではないかといった意味の反応を、好意ある言葉に包んで寄せて下さったことを憶えている。また、故鎌谷幸信氏は、本書に収められた Dylan Thomas の“Poem in October”を巡る対話ほど多くの紙数を費やして Thomas 詩を論じた例を知らない、と書評してくれたことも記憶に蘇る。

川崎氏といえば、拙著「アメリカ現代詩と無」(1990)に収録されることになる Harold Bloom の大著、Wallace Stevens 論に対する私のクリティークについて、それが「きびしい論旨で、そのアイコンクラスティックな情熱が注目されるだろう」と書評して頂いたことも忘れがたい。Bloom に対する私の slanting な姿勢、アメリカ的批評の大家に癩癩玉を投げつけた例は、genteelism の横溢する日本の英米文学研究界では比較的少ない一種のバーバリズムかも知れない——私の片意地な批判が当を得ているか否かは別として。

## 4

永いとも言えない私の「研究」歴では、1970年出版の「ロバート・ローウェル」(研究社)にも思い出がある。話は遡るが、1960年夏から翌年春にかけて初めて合衆国に滞在したとき、ボストン出身の Lowell には注意が向かなかったと思う。それは教員留学生として西海岸のサン・フランシスコ州立カレッジに振り向けられたことが大きな理由であるようだ。西海岸のこの美しい都会は文学史上「サン・フランシスコ・ルネサンス」と呼称されるようになった地であり、所謂「ビート詩」と密接な関係があった。この州立大学の教授でサン・フランシスコ・ポエトリ・センター創立に役割を果たした Ruth Witt-Diamant 教授の現代アメリカ詩の授業に出席していた私は、殆ど専ら Donald M.

Allen 編の *The New American Poetry* (1960) に含まれている詩人たちの作品を読んだり、その中の何人かの自作詩朗読会にでかけたりしていた。ある日、この教授の家に呼ばれていたとき、そこに宿泊中の Delmore Schwartz に紹介されたが、Auden の再来とまで称されたことのあるシュウォーツを私は読んでいず、偶々牛乳を飲んでいた詩人と挨拶を交しただけである。Ferlinghetti の作品は少し読んだ。また、彼が市内のユニオン・スクエアでかなりの数の聴衆を前に、当時の大統領アイゼンハワーの外交政策を批判する演説をし、大統領を“asinine”（バカ者）呼ばわりしたのを憶えている。（“asinine” という単語はそのとき初めて知った。）

ビート詩の出版元 City Lights を訪ね、共同経営者である Ferlinghetti 氏に会ったとき、私は故諫訪優氏から Ginsberg 宛に頼まれていた質問をした（「“lollipop” って何ですか？」）。氏は、Ginsberg はいまは市内には居ませんが、と言い、しかし私を昼食に誘ってくれた。終始穏やかな感じで接してくれたこの紳士が、あのような言葉遣いで政治批判するとは思いがけぬことであった。（Ginsberg と会うことになったのは、私が後年大妻女子大に勤めるようになってから、日本アメリカ文学会の全国大会が大妻で開催されたときである。そのときのことは『アメリカ現代詩と無』に収めた記事の中に書いたので、ここでは省く。）サン・フランシスコを巡る思い出は尽きないが、これ位にした。Lowell について本を書くようになったのは、その後暫くして、故安藤一郎氏のお宅で毎月一回開かれた現代英米詩の研究会に出席する機会を得たことが契機となったと思う。これも有難いことであった。

さて、「ロバート・ローウェル」を私は張り切って書いたが、本書に何がしか長所があるとすれば、それは「あとがき」に記したように、初期 Lowell の *tour de force* とも称すべき威力に満ちた “The Quaker Graveyard in Nantucket” の中の幾つかの点について作者に質問をしたとき、思いがけず返信を戴き、この長詩がコルビエールの “Paris Nocturne”（夜のパリ）の翻訳から始まったのです、と答えた例をはじめとして、幾つかの創作上の秘密を明かした事例を利用できた点にある。

Lowell が自らの創作過程について語ってくれた手紙その他の書類を、氏の没後11年経って私は恩返しにとハーヴァード大学の Houghton Library に寄贈することを思い立ち、1988年の夏初めて氏の生地ボストンを訪れた。今は Lowell Papers の一部になっている筈のこの手紙を寄贈する前に、ハーヴァードの著名な詩批評家 Helen Vendler 氏に見せたところ、“Charming!” と言われた

ことを思い出す。(Vendler氏といえば、日本アメリカ文学会のために来日した際、東京での講演会で司会を務めさせて頂いたこともあり、また、縁あって氏の評論を若い人たちと一緒に翻訳し、彩流社から出版できたのも嬉しい思い出となった。) いま想像するのだが、詩人が創作上の秘密を事もなげに、名もなき外国人に明かしたのは、アメリカ人批評家たちを相手にする場合と違って、もしかしたら気安さがあったせいかも知れない。(忘れぬうちに書き添えれば、私はこの本を原稿段階で新倉俊一氏に読んで頂いた。)

私はコルビエールの詩と、それが影響を与えたとと思われる Lowell 詩の中のパッセージを比較しながらコメントを綴ったが、アメリカ人批評家は誰一人として“*The Quaker Graveyard*”に関わる Lowell の手紙を利用したことはないようである。もし Lowell Papers が整理されて——未だそうっていない場合の話であるが——索引なども完成されたら、この手紙が発見されることになろう、と想像している。Lowell はこの詩の場合に限らず、多くの詩人や作家を換骨奪胎して創作したが、その「創作」が翻訳または翻案と密接に関わっていることの一つの顕著な実例をそこに見ることになるだろうし、この実例が偶々日本にまで吹き流されてきた、それこそ windfall であったことを知る人もいるかも知れない。

## 5

1977年に「ことばの戦ぎ——アメリカ現代詩」という内容の不揃いな本を出したが、本書について Keiko Beppu 氏が *American Literary Scholarship* (Duke University, 1981) で次のように説明している—“... Of special interest is the section on A. R. Ammons in chapter 4... Tokunaga rates Ammons highly as a new Romantic who combines the poetic traditions of the 19th & 20th centuries —Emerson and Whitman on one hand, and Frost and Williams on the other. This is the first extended study on Ammons in this country [i.e. Japan] and a valuable contribution to our scholarship on Ammerican poetry.” しかし、ここに含まれている讃辞は私のアモンズ論の欠陥によって相殺されるべき側面をもっている。と言うのも、私が Ammons 詩における重要な点について、漸く2000年に「英語青年」(8月号)で書いたように、東洋思想とりわけ老子が Ammons に大きな影を落としているのであり、当時の私は勿論だが、Beppu 氏もその点に思いが到らなかつたらしいか



らである。(なお、“a new Romantic”としてのエッセイを英語で書いたとき、私は Kirkup 氏に原稿を送って読んで頂き、二、三のマイナーな点に朱を入れて貰った。)

『ことばの戦ぎ』には Lowell の “Waking Early Sunday Morning” という氏の中期を代表する一篇について書いたエッセイが含まれており、表題は「糞便学的・性的終末論(?)」という目醒ましい(?)ものである。Lowell は私信の中でこの詩がトロキー(強弱格)の韻律になっていて、創作時に Stevens の “Sunday Morning” が脳裡にあったことを、他の創作上の秘密ともども教えてくれた。私はこの重厚な詩篇が含まれている、Sidney Nolan の挿絵入りの豪華版詩集を携えて、日本女子大構内に居住していた Kirkup 氏を訪ね、一緒にこの詩を読み、コメントを交わしたことがある。K氏は、この詩の内容だけではなく Nolan のイラストレーションからも刺戟を受けたのであろう、やがて氏一流のイデオシンクラティックな才能を発揮して、上記のような表題でかなり長いエッセイを書いた。その後、このエッセイの発表に対する Lowell の危惧にも拘らず、暫くして氏はカナダのある雑誌にそれを発表したのである。

そんな経緯の後、私はK氏のこの controversial な論文の一部を批判する点を含めた “Waking Early Sunday Morning” 論を書いたのであるが、それを収録した『ことばの戦ぎ』が出版されたとき、ある書評子はK氏の論旨の一部(糞便に関する件)が不潔であると咎めた。この書評子の発言は、日本における英米文学研究の大半が無風地帯に安住していることを考えれば、予想外とも言えないことを改めて認識した次第である。ともかく、私はK氏の風車に煽られて静穏な池の面に slanting な一石を投じ、それが一寸した波紋を拡げることになったのを、今は一種懐かしい思いで回顧する。

Lowell については、その後1981年に「放浪と叛逆のポストニアン」という副題を添えたいわば続篇を書き、沢崎順之助、新倉俊一の両氏が書評でその特徴を紹介したが、すでに触れた *American Literary Scholarship* の別の年度版で Beppu 氏が次のような紹介と評価の記事を書いた—“Tokunaga’s approach to his subject is classical... he seldom goes beyond the established view of the poet... with the critic’s careful reading of Lowell’s poems in chronological order, accompanied by Japanese translations—the strategy used in his *The Frisson Nouveau: Contemporary American Poetry* (1979)—the book serves as a good anthology of the poet. *Robert Lowell: An Exile and*

*Rebel of Boston Society* is a very readable critical biography, a relief to this liberal humanist. The book makes the poet, least known of his contemporaries in this country, accessible to beginners and even more endeared to our enthusiasts.'

Beppu 氏の文章で '*The Frisson Nouveau*' とあるのは、拙著『ことばの戦<sup>ま</sup>ぎ』の「あとがき」と表題を考慮しての伝語（「新たな戦慄」）であり、私は主に Plath や Lowell の、また幾分かは Berryman の詩に相応しいと思い、フランスのある詩人たちに用いられたことのあるこの句を思い出して使ったのである。次に、'the poet, least known of his contemporaries in this country' という句はやや意外な感じがするが、翻<sup>ひら</sup>って考えてみれば、Lowell と彼の「同時代詩人たちは、Elizabeth Bishop も含めて「最も知られていない」卓抜な詩人ということになるのだろうか。Beppu 氏は更に、私が引用した詩に日本語訳を添えていることを“strategy”と考慮しておられるが、そもそも詩はそれが書かれる国語にのみ存在するのであれば、翻訳や詩人または詩的才能に恵まれた批評家によって意識的に誤訳（再創造）される場合にのみ意味ある翻訳となるのであって、私の場合は、とりわけ Lowell 詩を引用する際に大方の日本人読書を考慮して、原詩の散文的説明として「翻訳」を添えたまでのことで他意はない。このように考えれば、「戦略」という言葉は私には少々ものしい、また面映い響きを伴っているのである。

## 6

私は1972年、ごく短い間イギリスに滞在したことがあるが、そのとき少し無理をすれば、当時 Kent 州に住んでいた晩年の Lowell に直接会うことが出来たかも知れないのに、残念であった。それはそれとして、Lowell より若い詩人で優れた詩的出発をした W. S. Merwin を知るようになったのは、関東学院ポエトリ・センターに氏が講師として来日した前後である。Merwin は若い頃に Lowell の影響を受けたアメリカ詩人の一人であるが、やがてアメリカ人らしく詩風を一新し、更には仏教にも大きな関心を寄せるようになり、同時にエコロジカルな関心をも強めた。氏が関東学院ポエトリ・センターのセミナーの翌年、日本アメリカ文学会の招きで再度訪日したとき、私は関西での講演と東京での自作朗読会で司会を務めた。

それから間もなくだったと思うが、Brown 大学のある記号論学者が Merwin

の詩を記号論的に扱っていることを同僚から知らされ、早速その論文を読むと同時に記号論なるものを少し齧<sup>かじ</sup>ってみた。現在は記号論 (Semiotics) なるものがどれほど流行っているのか知らないが、Merwin の記号論的解釈に接したとき、私の中にまたしても slanting な考えが頭を上げたのであり、記号論的な詩の解釈 (または読み) を批判する論文を書いた。こうして、全体としてはかなりの紙数に上る Merwin 論その他を含めた『アメリカ現代詩と無』(英潮社) を1990年に上梓した。(この本は驚いたことに重版となった。) 1990年、私は60歳であり、それ以前から東洋的な「無」に何やら惹かれることの多い心境になっていた。想起こせば、30歳になる前に Spender 氏の *Encounter* 誌に、日本文化への回帰といった意味のことを書いた私は、「無」という日本文化の優れた特質を頭の片隅に置いて『アメリカ現代詩と無』の大半を書いた訳であり、アメリカ詩に導かれるようにして30年後の私を預言したと、——もちろん後知恵も手伝って——考えている。

次に発表できた本は1992年の『T.S.エリオット』(清水書院)であるが、これは福田陸太郎氏と、森山泰夫氏による緻密な Eliot 研究を利用する機会に恵まれなかったら、到底試みることのなかった冒険であった。何しろ夥しい Eliot 学者が日本にいることを知っていた者としては、Eliot について本を書くことなど怖ろしい企て以外の何物でもなかったのである。ともあれ、Spender, Lyndall Gordon, Peter Ackroyd その他の著作を利用して Eliot の輪郭を描こうとしたことも懐かしい思い出である。

## 7

更に私は偶然にひそむ必然の糸に導かれるようにして、「英米詩」を含みながらもその枠を超えたカリブ海の詩人、Derek Walcott を読むようになった。直接のきっかけは、彼の *Midsummer* という詩集を丸善(日本橋)で偶々手に取り、頁を繰ってゆくうちに、Lowell の一時期の詩的声——3つの修飾語、それも特徴的なことに現在分詞形が詩行を駆動する韻律——に接したことである。その後、買い置きの *Collected Poems* を読み、更に1990年の *Omeros* に目を通したとき、何かを書きたい衝動に促されて(勿論、英米の書評も少し読んだ上で)、「カリブ海のアポロ」<sup>ホメーロス</sup> という紹介記事を書いて「英語青年」に載せて頂いた。

そして、すでに『シルヴィア・プラス詩集』を出させて貰っていた小沢書店

に話して、Walcott の訳詩集を同社の「20世紀の詩人」シリーズに加えさせて頂いた。この詩集が出る前、全く予期せぬことながら、Walcott がノーベル賞を受賞したという報せを1992年秋のある新聞の夕刊で読み、嬉しくなった私は直ちに「英語青年」の編集者に電話をかけて報告したことを憶えている。

話は少し脇へ逸れるが、Walcott を読んだために、私はそれまで断片的にしかなかったホメロスの叙事詩とダンテの神曲を複数の英訳で読むことが出来たのは大きな収穫である。(これらの古典の現代日本語訳は内容を正確に移しているかどうかは別として、詩としてはつまらないから、参考までに少し覗き込んだだけである。現代日本語の不幸を思うのは私だけではない。)

さて、Walcott はその後、1994年、読売新聞社主催の「ノーベル・フォーラム」に参加するため来日し、氏の講演——といっても、実際は自作詩朗読に変更された催し——に津田塾会から聴衆の代表として参加するようにと依頼されて、津田ホールで義務の一端を果たすことになった。同時に、カリブ海の文化的風土と欧米文学の学殖の豊かさを体現した氏の人柄の大きかたで気さくな面にじかに触れることが出来たのも望外のことであった。

目に見えぬ糸に更に導かれるようにして、私は関東学院ポエトリ・センターで面識を得ていたアイルランドのシェイマス・ヒーニー (Seamus Heaney) の詩についてエッセイを書き、彩流社から「ウォルコットとヒーニー——ノーベル賞詩人を読む」という、内容的には均衡を欠いているかも知れない本を刊行することができた。関東学院ポエトリ・センターでは、Heaney 氏による最後のセミナーが終った日の夜、参加者たちが常に温顔に笑みを湛えたこの詩人を囲んで酒を酌み交したとき、私は Robert Lowell の名前を出したのだが、翌朝お別れの際に氏は自作詩集に含まれている Lowell 追悼の vignette とも言うべき作品を急いで筆写して、記念にと与えて下さった。

Heaney 詩を扱ったエッセイで、私はアイルランドの歴史や政治と詩の複雑な係わりについて突っ込んだ詮索を行わず、詩を究極的に支えるだろう言葉の音と意味の関係に集中することが多かった。こう書いてきて追加したいのだが、「ウォルコットとヒーニー」を書いているとき、私は Walcott のある詩行の放つ音声(蟬の声を表現した句)に言及したが、その際「閑かさや岩にしみ入る…」を思い出して、新潮社刊の芭蕉を扱った一巻を繰ってみたところ、‘shimi-iru semi’ とローマ字化された日本語が、岩に浸透する蟬の声を音的に如実に表現するという解説を読み、芭蕉の句の面白さを再認識したことを昨日のよ

うに憶えている。活字としての詩の所謂「意味」を受け取るだけでは面白くなく、また、大半はそのようにしか書かれていない日本の難解な現代詩に漠然とながら不満を抱き続けていた私は、英米詩を読むことに一段と大きな楽しみを感じていたのだから、芭蕉の句のこのような読みに我が意を得たりの感を深くしたのである。

ともあれ、70歳を目前にして、私はさまざまな意味で *slanting* なことを繰り返しながら、しかし多くの人たちとの縁に導かれて、英米詩研究を続け、それによってかぼそい人生ではあるが支えにしてきたことに思い到る。以上、不完全な自伝的回想を綴る気になったのは、日本エミリー・ディキンソン学会の稲田勝彦会長から講演の依頼を受けたことが契機となっている。稲田氏は「日本における英米詩研究」という演題も用意しておられたが、それは私には荷が重すぎると判断したので、厚かましい気持を残しながらも「英米詩研究」に自己流の濃い色を付けることになった。ささやかで不十分な回想を終えるに際して、学会と稲田氏に改めて謝意を表したい。

平成12年 8 月